

## 審査の結果の要旨

氏名 菅原 慶子

近年、大学の教育・研究機能と並び、第 3 の機能として「社会貢献」の重要性が強調されている。大学の教育や研究も長い目で見れば社会貢献であるが、より直接的に社会への還元をめざした取り組みとして公開講座や地域人材の育成、大学の図書館や施設の開放などの多岐にわたる活動が行われている。こうした活動を包含する概念として“University Extension”が用いられるが、この用語はイギリス由来の概念で、伝統と権威を持つ大学が庶民の高等教育開放の要求に応じて取り組まれたものとされたため、日本の戦前期、とりわけ官立高等教育機関において“University Extension”に類する取り組みはないという解釈がこれまでなされてきた。本論文は、明治期の東京大学と早稲田大学（前身校を含む）で自主的で組織的に行われた口述による学術普及活動の実態や導入理由を解明することにより、草創期ゆえの大学と社会の関係性を考察することを目的としている。

本論文は序章、東京大学を扱う第 I 部（第 1 章～第 4 章）、早稲田大学を扱う第 II 部（第 5 章～第 8 章）、両校の比較を行う第 III 部（第 9 章～第 11 章）と終章から構成されている。まず序章で、本論文の課題設定と先行研究の分析が行われ、本論文の分析枠組みと史料・方法が示される。第 I 部では、その前身校である東京開成学校時代の 1877 年から、欧米の大学の標準的な設備とみなされた大学講堂の建設と市民への公開演説会を組み合わせた東京大学で最初の学術普及の実態としての「法理文三学部演説会」が存在したこと、その後の政府による政談演説会の禁止を受けて「理医学講談会」へと発展し、さらに帝国大学としての存在価値や学問に対する理解を得ようとして「大学通俗講談会」へと全学に拡張したことを明らかにしている。第 II 部では、東京専門学校創設初期の 1885 年から「同公会」という学生有志と大学が一体的に活動し、卒業生を担い手とする地方での学術普及という基盤が形成され、その後の英米の“University Extension”の紹介を契機とした「巡回講話」がトップダウンで導入され、早稲田大学大学部の開設後の 1910 年から学術普及の専門部門として開設された校外教育部による「巡回教育」が実施されたことを解明した。第 III 部では、両校の共通点として、創設前後から口述による演説会形式の学術普及活動を開始している点、広く市民の聴講を得るための運営の工夫などを指摘したうえで、誕生したばかりでまだ脆弱な存在であった日本の大学が欧米型 University を強く志向し、その実現のため必然的に編み出された手段としての学術普及活動といった側面を浮き彫りにしている。また両校の違いは各校の置かれた社会的布置の違いにより生じ、東京大学では市民からの大学と学問に対する理解を得ることが、早稲田大学では学生募集や基金募集による経営基盤の安定化が不可欠であり、そのために東京大学では幅広い専門学科の教養的知見に触れさせる活動が、早稲田大学では地方中心に経営資源の獲得と入学者の確保にも通じる活動が行われたことを比較考察した。

本研究は従来の枠組みで見落とされてきた大学と社会の関係の実態に着目し史料をもとに丹念に実証したうえで、日本の大学草創期ならではの大学の対社会的活動の特徴と意味づけを示した点に特に意義が見いだされる。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。